しろ

全作品と講評
www.columnland.net

白は美しい。

白い城

姫路市民が圧倒的な信頼を置く建築物がある。そう、姫路城である。姫路市民はこの建物をこよなく愛し、崇拝し、依存しているといっても過言ではない。その姫路城に対する執着は姫路市街の構造からも垣間見える。姫路城を基準として駅から出た観光客がまっすぐ姫路城にすすめるように整備された道。姫路城よりも頭が高い建物は立てることすら許されない厳格な社会がそこには存在する。あたかも白ペンキで塗ったかのような圧倒的な白さを誇る建物を姫路市民は愛称をこめて白鷺城と呼ぶのである。しかし、この城に対してここまでの尊敬を抱く姫路市民も初めからこうだった訳ではない。明治初期において、この城は他の城と同様に文明開化によって忘れ去られる危機にあった。明治六年の廃城令によって日本の城の多くがもはや不要であるとして破却された。姫路城は競売に付され、ある金物商が２３円５０銭で落札した。城の古鉄または瓦を売るのが目的であったというが、一般家屋に転用するには城の瓦は大きく重いことや解体費用がかかりすぎるとの理由で結局そのままにされ、権利も消失した。このようなぞんざいな扱いを受けた姫路城だったが、状況が大きく変化したのは第二次大戦のある出来事による。米国によって姫路に大規模空襲が行われ姫路市街のほとんどが焦土と化したのである。しかし、我らが姫路城は降り注ぐ爆弾の雨を謎の力で回避することにより被弾数発。延焼なしで大規模空襲を潜りぬけ、翌日の朝も燦然とその輝きを放っていたのである。コレが現在の姫路市民の姫路城崇拝の始まりであるといってもいいだろう。

時は平成、四百年の歳月を超えJR西日本山陽本線姫路駅北口を出ると正面にその美しい城はそびえ立って……って、あれ？あ、姫路城改修工事中やった。なんも見えへんわ。

ぼくの役目は、踏まれること。
目印であり続けると同時に、よごされること。

毎日通学するむじゃきな子供たちがぼくを踏む。
ぼくを踏まなきゃ死亡とか、わけの分からないことを言ってる。
ぼくはお役目が果たせるのであれば、それでうれしいんだけどね。

でも、最近きになることがある。
せわしい現代人は、まわりを気にすればいいとおもって、
ぼくにみむきもしない。ぼくを踏んでくれない。

だからね、ぼくにはお願いがあります。
急いでたって、ぼくを踏んでほしい。
ぼくは、みんなのことをおもって言ってるんだよ。

踏まれて色がくすんでも、
誰にも感謝されなくてもかまわない。
今日もぼくはみんなに安全をとどけます。

ヒトガタ流シ

「形代（かたしろ）というのを知っているかい。」

大叔母が語り始めた。これまでたくさんの話を聞いてきたがこれは初めてだ。理子は首を振り、先を促す。

「身代わりにね、罪や穢れを載せて流すのさ。大抵は紙だ。もしくは格の低い生き物か。だがそれを人間にしてやるとね、もっと大きなものを流せるのさ」

大叔母の歳は誰も知らない。親戚の中では確実に、ひょっとしたらこの国でも、最長寿なのではと理子は思う。腰は曲りだみ声で話す大叔母は昔話の山姥のよう。恐ろしくも不思議な魅力を持つ。一族の歴史なら有史の先より覚えていて、今日のように理子を散歩に誘っては語ってくれる。まるで、はるか昔悠久の記憶をその身に通わせて生きているようだった。

その日は幼い弟も一緒に歩いていた。すごいものを見せてやるから連れておいで、と大叔母が言ったのだ。朝もやの中、国道をはずれて岬にでる。海の上は塗り込めたように真っ白な霧で覆われていた。霧は沖に行くほど濃くなり、岬から見下ろすとましろの靄（もや）の手前を太い川が流れているのが見える。これが光の加減だとは信じられないほどそれらしい。

「ほらこの川が見えるかい。海が川になるのは彼岸がわたしを迎えに来るときさ。流される前に彼の世の使いに代わりを引き渡してやればいい。形代として送ったものの命数の分だけ川を遠ざけておくことができる」

言うと大叔母は屈みこみ、コンクリの突堤の下から小さな筏（いかだ）を引き出してきた。

「これに乗ってみないかい?」

大叔母が弟に声をかけた。ピンと来ない様子の弟を、どこからそんな力を出すのか抱き上げて水面の筏におろす。理子は魅入られたようになって身動きもできない。

やがてゆらゆらと筏は向こう岸を指して進みだした。

「お姉ちゃん!」

絹を裂くように。ここで初めて弟が声を上げた。理子ははっとして我に返る。足をかけて大叔母を転ばし突き飛ばし、阻まれないようにしてから必死に手を伸ばす。掴む。そのまま後ろに放り投げる様にして小さな体を引き上げた。

背後に荒い息遣いを感じた。

「お前でも構わないんだ!目をかけてやったのに残念だよ」

岸からまだ半分ほど身を乗り出していた理子は背中を蹴られて頭から転がり落ちた。水は冷たい。まとわりつかれて体は思うように動かない。それでも必死に手を伸ばす。最初に触れたものをむんずとつかんだら、大叔母の踝だった。

その瞬間。

何が起こったにか。理子は岸上から、ほんの一瞬前まで自分がいた所を流されてゆく大叔母を見ていた。遠ざかる速度は筏の弟の比ではない。瞬く間に小さくなり波間に消えた。

大叔母と共に霧も川も引いていき、あとは普段の海が穏やかにたゆたっていた。

あどけない弟を抱きしめて、理子は目を閉じた。

白い休日

誰も居ない家に帰ってきた。ただいまが静寂に消える。
休む日と書いて休日だけど、世の中の殆どの人にはそれぞれに用事があって本当に休んでいる人など実際少ないのではないだろうか。
僕はちゃんと休んでいる。今も暇過ぎて散歩に行って帰ってきたところだ。

今でこそ休日は天国だけど、サッカーをやっていた時は酷かった。毎日毎日練習ばかりして家に帰ればすぐに寝る。休日もそれは変わらない。
それでも楽しくなかった訳じゃない。良いプレーが出来れば死ぬほどに嬉しかったし、試合では命がかかっているみたいに熱狂した。例えピッチに入れなくともそれは同じだった。僕はサッカーが好きだったし、何よりサッカー部が好きだった。
でも、僕はサッカー部を辞めた。大会の二回戦、授業と被った俺達、いやレギュラーの人達は公欠で授業を休んだ。俺は教室で自チームの勝ちを聞いた。
その時からだった。全部が白くなりだしたのだ。グラウンドもボールの模様も友達の顔まで、全部が白く薄くなっていって、何も感じなくなった。選ばれなくても悔しくなくなって、上手くやれても嬉しくなくなった。きっと始めに白けるという言葉を使ったのは僕みたいに周りの物が白くなるのを見た誰かなのだろう。白けるってきっとそういう事だ。辛い練習に耐えてまで取る色がそこには無い事なんだ。

誰も居ないリビングで一人テレビを見る、ぼんやりと。重い怪我を負いながらもアメフトに打ち込み続けた高校生の特集のようで、自信を無くし退部届を出そうとする彼を親友が止めるシーンである。
受験を理由に退部届を出して、そして誰の反論も受けなかったのをつい思い出してしまう。
テレビを消して自室に行く。何か面白い事はないかとパソコンを開く。

ガチャンという音に続いて母のただいまが耳に入る。アダルトサイトを消して、パソコンを閉じる。もう7時だ。リビングに行って夜ご飯の支度を手伝う。サッカー部はそろそろ練習が終わる頃だろうか。

食卓で冬休みの予定を聞かれる、家族でスキーをする日を決める為だ。開いた手帳のカレンダーに予定は無い。家族スキーの日が決まり手帳に予定が書きこまれる。僕の真っ白な未来に放り出された一片の黒はあまりにも小さくて気づけばサッカーボールとかチームメイトの顔とかみたいに白く薄く消えてしまいそうだった。

なんで色で塗り分けなくてはならないのだろう
隔てているのは　たった一本の点線なのに

その点線は　たくさんの戦によって生み出された
平和のための境界線
だけど今もまだ
点線を変えようとしている人たちがいる
自分の国の利益のために
人間のちっぽけな欲望のために

人間の嫉妬と欲望が生み出したこの定義が嫌になって
おもいきって　すべての国を同じ色で塗りつぶしてみたら
点線なんて見えなくなった

そうだよ
宇宙からみた地球には
点線なんてないじゃないか

「白地図」

モノクロゲーム

とある山奥の洋館で催されたパーティで殺人事件が起こった。犯人の候補はその時洋館にいた十三人。以下は、犯人である黒崎紅含め十三人が、警察署において警官に事情聴取されている時の様子である。

「さて・・・あなた方には、これからあるゲームをしてもらいます。」

警官がこんなことを言ってきた。

「ゲーム?そんなことしてる場合かよ!この中に殺人鬼がいるんだぞ!」

誰かが叫んだ。全く持ってその通りだ。数時間前に人を殺した誰かと同じ部屋にいるという事実だけで、普通の人間には耐えられないだろうな。ま、俺は実際に殺したわけだから残念ながらその気分は味わえないが。

「いえいえ、これも立派な捜査の一環です。」

そう言って警官はゲームの内容を説明し始めた。

一人につき十二枚のカードが配られ、その内訳は、一枚が黒で、残りは白。さらに、十三人の名前がそれぞれ書かれた箱が用意され、犯人だと思う人に黒を、それ以外には白を投票するという、簡単なルールだった。

まあ深く考えても仕方ない。俺は、俺以外の十二人の内、一番怪しそうな中年の大久保という男に黒を入れた。俺の内面は腹黒いクソ野郎だが、見た目は普通だ。おそらくこいつに票が集まるだろう。

「それでは、公開致します。」

十三個の箱が一斉にひっくり返された。俺の目の前にあった箱から出てきたのは。

黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒。

計十二枚の黒だった。

「なっ・・・!?」

圧巻だった。普通に考えて十二人もの人間が同じ人間を指定するのは偶然じゃない。どこかでボロが出たのだ。

だが証拠は残さなかったはずだ、何故だ?

「というわけだ、黒崎。覚悟はいいか。」

「・・・」

馬鹿な、こんなはずじゃない。

だが、絶体絶命だ。もう助からない。

「・・・そうだ。俺が犯人だ。」

「ほう、聞いたか皆。犯人特定完了だ。」

「そうだな。意外と早く終わったな。」

なんだと?俺がそう言う前に、十二人の候補者は一斉に自らの顔の皮を剥がし、警官服に着替え始めた。

「変装・・・だと!?」

「そう、こいつらは変装のスペシャリスト達。一人に対して黒を一斉投票し、その反応を見る。こいつらはシロと仮定されたチーム、白軍団ってわけだ。」

なんでそんな面倒くさいことを。いや、そんなことより言いたいことがあった。

「こんなことして騙しやがって、白々しいぞ!」

「ああ、その通りだ。だが、どんな手段を用いてでもクロを探し出す、それが俺たちだ。それに、お前の腹黒さには敵わねえよ。」

俺は何も言い返せず、目の前に積まれた漆黒のカードに泣き崩れた。

白い魔物

私が小学生だった時のことである。

その日は欠席者が多く、給食のときに数パックの牛乳が余っていた。いただきますをする前に、担任が「余った牛乳ほしい人もっていっていいぞ！」というと、あとさきのことなど全く考えもしない井上がまっさきに取りに行き、８パックもの牛乳を両手に抱え嬉しそうに戻ってきた。そうして給食が始まったわけだが、さすがは大食いと名高い井上、３パックまでは余裕でたいらげていた。彼は三角食べを何よりも意識する人間であったので、給食の方も順調に減っていっている。しかし、異変が起こったのは５パック目である。食べ物がなくなったのだ。しかも彼の表情は極度の満腹で明らかに苦しみに歪んでいる。彼はついに飲むのをやめ、３パックの牛乳をこちらにそっと置きに来た。彼に文句を言いながらも気の毒に思った私は牛乳を飲み始めたが、２パックで限界に達した。そして給食の時間は終わり、私と彼のもとには１パックの牛乳が残されてしまった。すでにそれを飲むという選択肢が頭にない私達は、どうやってこの白い魔物を退治しようかあれこれ考え始めた。

「これでキャッチボールしよう、割った方が負けな。」

急に井上がそんなことを言い出した。今考えるとわけがわからない案だが、当時の私はこの上ないほどの名案だと思い、喜んで了承した。そうしてキャッチボールが始まった。さすがは運搬車にゆられても破れないように作られている牛乳パック、２０往復ほどしても形状が歪むだけである。

「めんどくせぇ！」

急に井上の投げるスピードが速くなる、負けじと私も全力で投げ返す。そして３０往復ほどしたころにようやく時は訪れた。

パンッ

割れた。とたんに私の目の前は真っ白になった。どうやら牛乳を被ったのは私の方で、眼鏡に牛乳が大量に付着したらしい。わたしが我に返り眼鏡を拭いている最中、井上は大爆笑をしていた。しかし、私が眼鏡を拭き終えるころに井上の顔から笑顔は消えていて、私の後ろの何かを恐れながら見つめている。私も後ろの何かの気配に気づきそっと振り返ると、そこにはつくり笑顔でこちらを見る青白い顔をした魔物がいた。

ましろ色の小さな変化

ほぅ、と息を大きく吐き出す。
空気中の細かな塵と、吐息の水蒸気が凝結して白く染まる都会の空気。
肌の刺すような冬の冷気に、身を縮こまらせるようにぶるりと震えた。
「はぁ……今日も寒いねぇ」
誰に言うでもなく、小さく呟く。それだけで口からは白く染まった呼気が空気を染めた。
冬将軍の治める寒空の下をてくてく歩き、向かう先は我が母校、って言うかただ通学してるだけ。
空は薄い雲に覆われていて、見上げる天上は真っ白な世界。
雪でも降ってくれば情緒的なんだろうけど、降水確率はゼロパーセントらしいです。
……ちょっと残念。
「ま、実際雪が降った所でキレイってだけじゃ済まないのがこの現実世界ですよ」
踏み荒らされた雪は泥にまみれて汚いし、
それに少し積もれば電車は止まる、道がすべる、人が転ぶ、受験生ピンチ。精神的に。
――我ながら何という現実主義的コメント。女の子としてどうなんだ。
とは言ってもこの世界は虚構じゃないノンフィクション、奇跡も魔法もありはしない。
こうして極寒の冬気に身を震わせてるのが現実ってことよね。
「日常は日常、平凡な世界は機械仕掛けの如く変わらず動き続けますよ、っと」
足元の石ころを蹴っ飛ばしながら独りごちる。
ドラマみたいな急展開も、マンガみたいな超設定も、なんにもこの世界にはありはしない。
あるのはただ、いつも通りに繰り返される日常と、変わることのないその景色。
人はすべからく社会の歯車、か。上手いことを言う人もいたものよね。
同じ事を延々繰り返すのはまさしく歯車そのもの。もしくは時計の針とか。
「……ま、その変化の無さをこそ愛する人もいるんだろうけどね」
胸踊る冒険に憧れる人がいるように、木漏れ日のような穏やかな日を望む人もいる。
得てしてそういう人ほど波乱万丈な人生に巻き込まれるって言うけど、世の中はままならない。
そのままならない世界は、やっぱり変わらず回り続ける。
「今は今、この生活を続けるしか無いんだよね」
何となしに、道端の舗装されてないところにジャンプした。すると――
サクッ、と妙に耳障りのいい音が耳に飛び込んできた。
「ん？　……何の音？」
足元を見やる。そこにはあるのは、土を浮かすように立った白い霜柱。
……昨日には無かった、昨日とは確かに違う今日の景色。
「霜、かぁ。そう言えばそんな季節だよね」
ほぅ、ともう一回白い息を大きく吐き出す。
そうしてサクサクと霜を踏みしめながら、ほんのちょっぴり心が楽しくなった。
世界は変わらず回り続ける。こんな小さな霜柱なんて、なんの影響も与えない。
でも、通学路を行くわたしの足を少し軽くするくらいには、昨日と違う霜のある景色。
小さな、小さすぎる変化だけど――うん、今日は昨日とは違うって、そう実感できる冬景色。
そんなことを思いながら、サクサクと霜を踏みしめながら学校を目指した。

最近、シロの元気がないの

餌をやっても食べないし、なんだか顔色も良くなくて…

初めの頃は鎖が切れるんじゃないかってくらい元気に暴れてたのに

こんなに可愛がっているんだけどなぁ

何がいけないんだろう

シロの害になるような物は何もないよ？

真っ白い清潔な部屋を用意して

太陽を見て目が潰れないように窓もない

悪い人が入ってこないようにドアも頑丈に閉めてある

え？ここから出して？

それだけはできないなぁ

だってこの部屋から出したら、シロはシロじゃなくなっちゃうでしょ？

ね、私だけのシロ

動き出す静止時間

放課後の空き教室で君と二人きり。日は傾き、この空間を赤く彩っていた。
適当にファーストフードで買ってきたコーラにシロップを注ぎ込み、ストローでかき混ぜる。また「身体に悪い」と一言窘められるかと思ったが、君は読書に夢中のようで、それが今日も可愛かった。

そう、言葉で表すのなら君はお城の広大な図書館に住まうお姫様。三時間でも四時間でも、夜遅い下校の鐘が鳴るまで君は飽きることなく本を読み続けている。
僕はいつも放課後ここに来て、ただ、時間の流れに身を委ねていた。

「おい、お前ら付き合ってんのかよ」

ふと思い出す昨日の一言。相変わらず二人で過ごしていた時、通りすがりの友人からのものである。
僕と君とは四六時中一緒にいる訳じゃない。それどころかお互いの学年もクラスも知らない。ただ放課後に暇すぎて校内をうろうろしていた所、僕はこの教室で心なしか本を楽しそうに読んでいる君を見かけて、何となく傍に居たくなっただけである。

しかし「付き合う」って、何だ？
何かクラスの中には何人も付き合っている奴らがいるが、如何せん素人の僕にはわからない。
僕らの日常を振り返る。僕はただそこにいるだけなので君にとっては何ら支障は無いらしい。こちらは寝たり勉強したり雑誌を読んだり寝たりして時間を浪費していた。会話というものはまるで無いのだが、コーラにシロップを入れるとたまに怒られる。甘くて美味しいのになぁ。
そんな日々をただ繰り返しているだけである。一体全体色々諸々どうしろというのだろう。

しかし君はというと昨日も今日も動じずに本の世界に入り浸っていた。いつも無地のブックカバーを付けている為に本の内容さえわからない。僕が一人でうだうだと悩んでいる間、辺りは紙の擦れる音すらしない静寂に包まれていた。

「あれ、本、読んでる……？」

するとびくりと肩を震わし、慌てて本を捲る君。改めて視線を遣ると夕日に染められたその白い頬は桜色で、今までモヤモヤ胸に溜まっていた代物が吹き飛ぶくらい、可愛かった。

まぁいっか。ぼくはきみがすき。ただそれだけ。

この一方的な感情が恋情なのか友情なのかは知ったこっちゃない。
でも大好きな本を読まずに今日君は何を考えていたのだろう。むしろ今度は、それが気になる。

明日からは君のことを知ろうかなぁ、知りたいなぁ。ただ、漠然と思った。

人の始まりは白。
無垢で、純真で、何物にも染まらず、
どうとでも染まることのできる色。

人の外見は代。
見えるもの、表すもの、受け取られるもの、
しかし本質でないもの。

人の心は城。
高い城壁、開かれた城門、用途に沿った内装、
時にひどく崩される中枢。

人の生は支路。
どこにつながり、誰と交わり、どこに行くのか、
無限に続くわかれみち。

人の終わりも白。
骨、灰、無、
何もなくなった後に残る、始まり。

ＥＮＤＬＥＳＳ

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	無題（白は美しい）	9 pt	2 位	5 sp
		まさかないだろうと思った白紙答案（ほぼ）で今週のスタートです。 美しい白。あなたはどんな思いを乗せますか？ 意表を衝いた仕掛けでみんなを楽しませて最多特別賞とともに、このましろき世界にふさわしいシルバー・メダルゲットです、おめでとう!! 特別賞：バカには見えない文字で賞 from Q班（見えないスペースで白の美しさを語っている） 賞 from S班（白を表現するのにコレ以上のものはないだろう！） 今週のレイアウト賞 from T班（来週も楽しみですね） ずるいで賞 from V班（悪知恵働かせたなって思いました） 賞 from X班（白は美しい。） イチオシフレーズ：「」「白は美しい。」		
02	白い城	0 pt	10 位	0 sp
		定石通りの正統派枠。きっちり姫路城でまとめました。ふむふむと興味深い情報をしっかり届けつつ、さいごでやわらかく着地し、サーヴィス精神も披露して、とても安定した仕上がりです。 ちょっとぎっしりなので、あと２ヶ所くらい段落替えしてあげると、より読みやすかったのでは。 ポイント入ってもおかしくない力作だと思ったのになあ。天下の名城の地元から愛のお届けでした。		
03	どうろのうえのしろいしましま	7 pt	4 位	1 sp
		みんなやったよね、小学生の時。なぜか白がセーフティゾーンなんだ。 そんな思い出を喚び起こしつつ、せわしい現代人も足元ちょっと見てよと呼びかけるメッセージ性が加わったところがユニークな工夫として光りました。フォントもぴたりはまりましたね。 特別賞：タイトル左下斜めで賞（３ ６ 10同時受賞） from Z班（左下に斜めの字体でタイトルを書く人が多いから） イチオシフレーズ：「ぼくを踏んでほしい」×２		
04	ヒトガタ流シ	1 pt	8 位	0 sp
		ナウシカの大ババさまのイメージで読んでいたのに、なんてヒドイ大叔母さん！ 舞台設定がいいですね。白い霧の流れという幻想的な風景に魅了されました。悲しみを浄化してくれるような。		
05	白い休日	1 pt	8 位	1 sp
		サッカー部という集団からちょっとだけ抜けただけで経験を共有できなくなってしまう。白けるってそういうことなのかそうなのか。 サッカーボールの白黒とゆるくシンクロさせつつの、ていねいな心理描写で、一緒に体験しているような臨場感でした。さすがですね。		

		特別賞：多分オレの話で賞 from R班 イチオシフレーズ：「アダルトサイト」		
06	白地図	7 pt	4 位	0 sp
		なぜ世界から戦争がなくならないんだ！ 怒りがぶつけられた白地図。すとんと分かりやすく共感しやすい運びでした。 ラスト、宇宙へといざなってくれて、爽快に離陸できます。 特別賞：タイトル左下斜めで賞（３ ６ 10同時受賞）from Ｚ班（左下に斜めの字体でタイトルを書く人が多いから）		
07	モノクロゲーム	0 pt	10 位	1 sp
		12人が一斉に顔の皮をべりべりはがす光景に爆笑です。まるでコントを見ているような、映像的なおもしろさでした。 犯人の心を攻撃する心理戦。警察なかなかやるなあ。 特別賞：ゲームする必要なかったで賞 from Ｙ班（ゲームする前に犯人わかってるでしょ!?） イチオシフレーズ：「黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒」		
08	白い魔物	4 pt	6 位	1 sp
		牛乳パックでキャッチボール。小学生の無謀。ちびまる子ちゃんを地で行くようなコミカル展開で楽しめました。 あまりのリアリティ。実話と見た！ 特別賞：ノンフィクション大賞 from W班（実話……ですよね） イチオシフレーズ：「青白い顔をした魔物がいた。」×２		
09	ましろ色の小さな変化	3 pt	7 位	0 sp
		つぶやきを追っていくうちに、だんだん語り手のバックグラウンドが見えてくる。巧みな筆運びです。 それにしても、起きたできごとは霜柱の発見だけ。作者というものは、ついドラマティックに主人公を動かしてしまいがちのところ、とことん禁欲的に、ほんの小さな霜柱で抑え、急展開の予兆すらない。 ストーリー展開で引っ張れないぶん、描写力の真価が問われますね。おみごとでした。 イチオシフレーズ：「サクサク」		
10	白と私とシロ	0 pt	10 位	0 sp
		先週の続きだから、シロは人だって思ったんだって、ＴＡさんたち。シロと言ったら犬でしょうに。 ん？ 部屋？ シロがしゃべってる？ ううむ。「この部屋から出したら、シロはシロじゃなくなっちゃう」→あ、育てゲーね。 イチオシフレーズ：「私だけのシロ」 特別賞：タイトル左下斜めで賞（３ ６ 10同時受賞）from Ｚ班（左下に斜めの字体でタイトルを書く人が多いから）		
		8 pt	3 位	1 sp
		王道の放課後教室夕日射し、安定の恋未満設定。甘い甘いシロップもろとも、たっぷりと堪能させていただきました。		

11	動き出す静止時間	桜色の頬以外に「君」の外見についての描写はないのに、黒髪ロングストレートとしか思えないのはなぜ？ すっかりなじんだこの世界、ブロンズ・メダルの高評価をいただけました、おめでとう！ 特別賞：あまいで賞 from U班（内容もあまいし。コーラにシロップはあまいしふとるから。）
12	ＥＮＤＬＥＳＳ	20 pt　1 位　0 sp あまたの裏表紙候補を凌駕し、エンドレスというすばらしい工夫で、みんなの憧れの座ゲットです。 始まりの白から依り代を経て築く城へ、そして分かれ道からまた始まりへ回帰。この作者さんならではの鋭い観察眼と構成の妙、そしてフレーズの的確さにうなります。 「時にひどく崩される中枢」、たしかにね、深く納得の選び抜かれた言葉たちでした。 おめでとう圧勝の首位!!!